

地域から多様な テックリーダーが生まれる。 Waffleが変える、 これからのテクノロジー教育

特定非営利活動法人
Waffle

日本の理工系分野では、キャリアの各段階ごとに女性の数が減っていく。身近なロールモデルの不在、ジェンダーバイアス、機会の格差――。

こうした構造的な壁を壊し、テクノロジー業界に多様な視点を増やそうと、女子やノンバイナリーが「つくる側」へ進むきっかけを支えているのが、NPO法人「Waffle」だ。中高生が1日でWebサイト制作に挑戦し、IT業界で活躍する先輩のキャリアアートを聞く「Waffle Camp」、SDGsの課題を解決するアプリ開発やピッチに取り組む国際的なコンテスト「Technovation Girls」、未経験でもITを学びたい大学生向け「Waffle College」など、Waffleではこれまでさまざまな「入り口」を用意してきた。さらには、自治体や企業との連携を通じて、

都市部だけに偏らない学習機会を広げつつ、教育現場や政策にも働きかけていくつもりだ。「テクノロジーの未来は、もっと多様で、豊かになる」。そう確信しながら、日本中で女性やノンバイナリーのテックリーダーが活躍する未来を描いている。

Waffleが生まれたわけ

「どうして理工系に進む女子が少ないのだろう」。この素朴な問いは、日本の教育や社会に根深く残るジェンダー課題を映し出す。IT・テクノロジー分野では国際的に見ても女性比率が低く、高校での文理選択からキャリアの階段を上るにつれて、女性やノンバイナリーの姿は少しずつ消えていく。この状況は「水漏れパイプ」と呼ばれ、Waffleもこの構造的な問題を指摘してきた。

この現象は、個人の努力だけでは解決できない。複数の要因が複雑に絡み合う、社会全体の構造的な問題だからだ。義務教育ではSTEM（科学・技術・工学・数学）の重要性が説かれ始め、教育機会そのものに大きな差はない。それで



Waffleの森田久美子さんと辻田健作さん

女性がテクノロジー業界で活躍できる社会

この課題に、日本各地の教育現場・自治体・企業と連携して挑んでいるのが、2019年に立ち上がったNPO法人「Waffle」だ。Women Affection Logical Empowermentの頭文字をとった団体名には、「愛情深く、そして論理的に女性をエンパワメントしたい。難しく捉えられがちなテクノロジーを、お菓子のワッフルのように親しみやすくしたい」と

も、「理系は男子のほうに向いている」というステレオタイプや、保護者・教師の無意識のバイアスが入った進路相談での助言、ロールモデルの不足、心無い言葉や排除的な雰囲気によって学びを諦めざるを得ない環境、企業における不公平な賃金や評価制度などが存在する。こうした経験は積み重なり、女子やノンバイナリーの学びの継続意欲を削ぎ、挑戦の芽を摘み取ってしまうている。

テクノロジーは社会のインフラであり、未来そのものを形づくる基盤だ。AI、交通、医療、防災、金融など、日常のあらゆる領域に深く組み込まれ、欠かすことのできない分野となっている。だからこそ、女性をはじめ、多様なバックグラウンドを持つ人々が開発に参加しなければ、実生活における安全性や公平性は担保されず、結果的に「ジェンダー平等」の実現も遠のいてしまう。

いう想いが込められている。団体創設の裏側には、国内外で活躍する多様なリーダーの姿を間近で見てきた、メンバーたちの実感があつた。

Waffleのディレクター森田久美子さんの前職は、大手通信会社の技術職だった。国内では女性技術者が極端に少ない環境に身を置き、「最初は、男性が多いのが当たり前だと思っていた」と打ち明ける。ところが、米国ニューヨークの現地法人へ赴任した際、その前提が大きく揺らいだ。「大手企業のCEOが女性であることも珍しくないことを知りました。対して日本では、駐在員は男性ばかり。女性は『駐在妻』か、現地採用者ばかりだったんです。なぜここまで違うのか……」

その時の森田さんを支えたのが、元metaのCOOであるシェリル・サンドバーグ著「LEAN IN」（女性のキャリアとリーダーシップを後押しする内容）だった。「女性であることを理由に、自分の『仕事を頑張りたい気持ち』を否定しないでいいのだと腹落ちして、涙が込み上げてきました。全然違う世界があるんだと感動したんです」

帰国後は、女性のエンパワメントを目的に、日本初の企業内LEAN INサークルを立ち上げた。活動を始めるに当たって心ない言葉を投げかけられた経験もあるが、「だからこそ、女性たちが連帯する意味がある」と確信したという。

理工系分野に女性が少ない構造への間



Waffleディレクターの森田久美子さん

題意識は、自身のキャリアを通じて強く感じてきた。Waffleがメンバーを募集しているという案内を目にし、最初はプロボノとして政策提言やファンドレイジングに携わり、その後フルタイムメンバーに転身。現在は、組織の基盤整備と教育プログラムの設計などにも携わる。

PR担当の辻田健作さんも、IT業界での経験から、多様なリーダー像の必要性を痛感していた。社内で「仕事ばかりしていないで、早く結婚しなきゃダメですよね」とこぼす、若い女性社員の姿に衝撃を受けたのだという。「多様な価値観を知っているはずの世代が、無意識のうちに上の世代から受け継いだ古い規範を再生産しているのではないか」と感じた。社会や組織の構造そのものに働きかけたいと思い、Waffleに加わった。



（上段左から）森田久美子さん、田中沙弥果さん（下段左から）鳥井雪さん、正木千香子さん（2026年2月9日最終発表会参加者）



全国（特に地方）、「地方パートナーとの協働による
女子生徒の理系進路選択を促進するプログラムの提供」

<https://waffle-waffle.org/>

新しいIT教育の地図

Watteが目指しているのは、単なる「IT教育」ではなく、社会構造を変え、テクノロジーのつくり手そのものの多様性を増やすこと。これは、理工系進学／就職のジェンダーギャップの解消と同時に、新しく生まれてくるであろうイノベーションを支えるための取り組みだ。

10代の女子やノンバイナリーの若者が、「つくる側」に挑戦できるようにするために必要なのは、周囲の後押し、前向きな自信が生まれる環境、ともに学ぶ仲間、学びの機会をつくっていくことなどだ。しかし現状では、そのどれもが十分とは言えない。そこでWatfieは、継続的な学習機会、コミュニティやロールモデルの紹介、そして企業・行政・教育現場を巻き込んだ環境づくりへと踏み込んできた。

森田さんはWaffleに入ってから、環境による格差をより実感したという。「私の場合、学校に入る時や、就職した後に『先輩（ロールモデル）がいるから大丈夫だ』と思えた節がありました。でも、そんなロールモデルに出会えない人もいます。そうした人たちが抱く不安を、どのように取り除いていくことができるのかを考えています」

社会の仕組みによって可能性が失われているのなら、その仕組みを変えたい――。その思いから、WaffleはYUIみらいプロジェクトに参加し、教育プログラムを通じて何を目指すのか、といった「デジタル・コンピテンシー」を体系的にまと



Waffle Campの参加者

めた。結果として、プログラム全体の方
向性がよりわかりやすく、共有しやすい
指針になったのだという。

Waffleの取り組みを「個人」「コミュニティ」「機会・リソース」「政策」という四つの観点で整理できた成果は大きいと、森田さんは言う。「YUIみらいチームの伴走により、私たちが挑んでいる領域を改めて構造的に捉え直すことができました。国際機関や各支援団体の動向にも精通しているチームの、グローバルな知見があったからこそです」。Waffleの新しい地図として、事業設計に生かしている。

ジェンダー視点あるリーダーを育む

プログラミング教室へ行ったら、周り
は男子ばかりだった。そんな状況は、

今も存在する。そして、Waffleのプログラムでは、女性向け環境で学びたい人を受け入れていく。その上で、家庭環境や、経済的な事情によって「やりたいけどできない」「障壁を下げるため、企業や個人からの寄付などを活用したPC貸与や、受講料無償も実現している。また、初学者が陥りやすい「インポスター症候群」（自分の成功を運や偶然のせいだと考え、実力を正當に評価できない現象）や孤立への対策として、インターンや卒業生といった、年代が近い「二歩先」の先輩が同席したり、少人数にチーム分けしたりして、わからないことを安心して質問できるように工夫した。

Waffle Campでは、生徒にとって身近な「好きなもの」などを題材にし、初心者でも短期間で達成できる構成にしている。文系・未経験も参加でき、Webアプリ制作まひ行うWaffle College（大学生）では、コミュニティが学習継続を後押ししているのだという。また、プログラミングに加えて「少し先を歩く先輩の話」をセットで提供することで、成功体験と将来像を結び、自己効力感を引き上げることが目指す。

Waffleが掲げるデジタルコンピテンシーには、「技術力」や「自己肯定感」、「IT進路の自分ごと化」などに加えて、「エンダー平等な社会・より良い社会を創ることへの思い」を育むことが加わっているのも特徴だ。

実際に昨年、参加者向け講義にジェンダー要素を取り入れてみたことがある。

「ジェンダーギャップとは何か」と問いを投げかけ、フィンランドと日本の内閣写真を並べて構成の違いを示したり、参加者に「ジェンダーギャップを感じた瞬間」をチャットに書いてもらったりした。

上がった声は、今も昔も変わらない。「足を開いて座るなと注意された」、「制服でスラックスが選べるようになったが、『女子なのにスラックス?』と言われた」など、身近な場面で投げかけられている言葉が多いことが明らかになった。

森田さんは、「若い世代にも、ジェンダーステレオタイプはまだまだ投げかけられている」という現実を改めて突きつけられたと振り返る。

オンライン越しに広がった挑戦

Waffleでは、中高生が半年間かけて社会課題を解決するアプリを開発し、ピッチで外部評価を受けるプログラム「[Innovation Girls Japan]」を主催している。日本代表として、米国の本選へ挑むチームも生まれてきた。この中で、森田さんの印象に残っているチームがあるという。

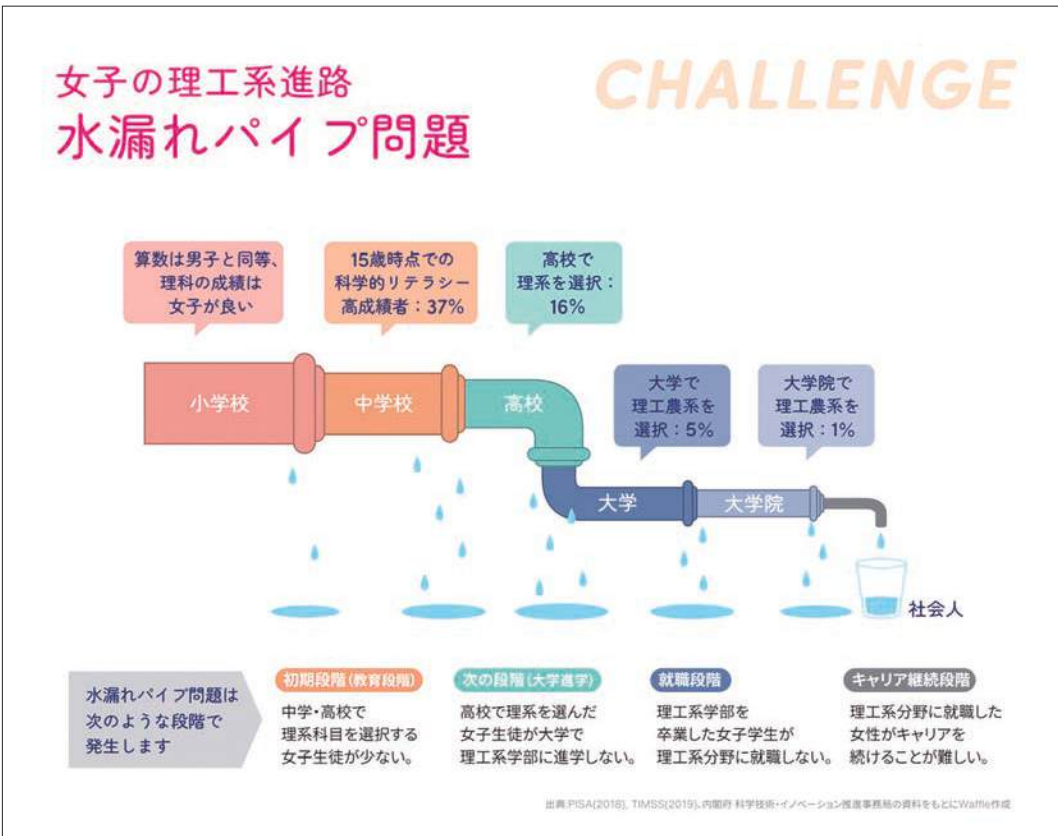
— ある日、高校教員から一通の相談が寄せられた。「手に障害がある生徒を受け持っています。プログラミングに興味があり、参加を希望しています。受け入れは可能でしょうか」。Zoomの使用や、タイピングができることを確認し、生徒の参加が決まった。

結成チームでオンライン議論を進める

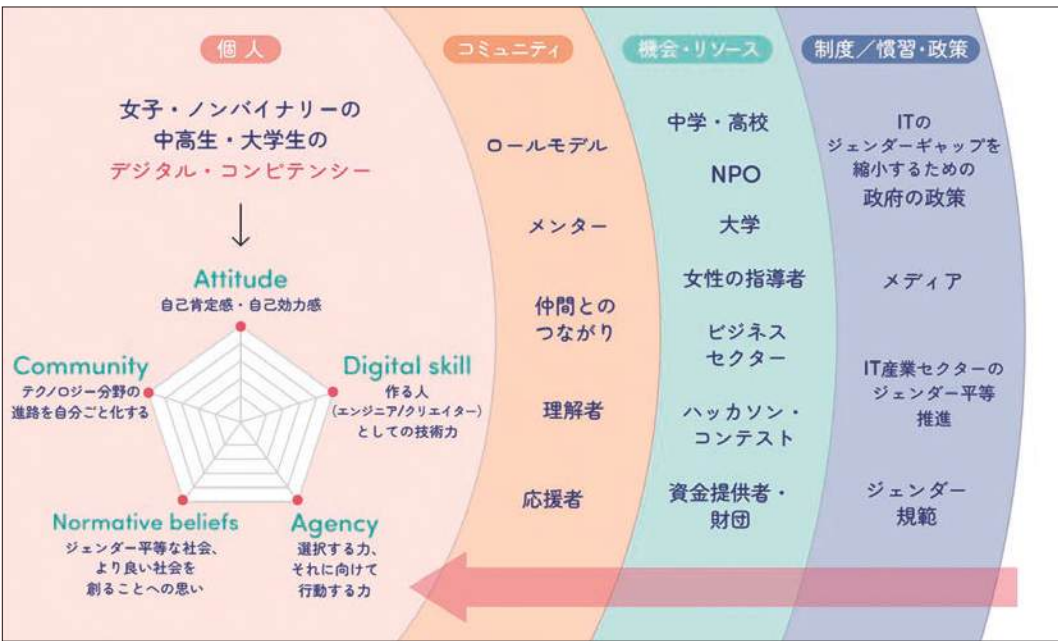
オンライン越しに広がった挑戦

れている」という現実を改めて突きつけられたと振り返る。

■ Waffleが指摘する“水漏れパイプ”を示す図



■ デジタル・コンピテンシーなどをまとめた体系図





中高生向けの音とテクノロジーのワークショップの様子

地域で広がる「参加」の芽

子どもたちが学びの一步を踏み出す原動力は、家庭や学校、地域といった「日常生活の場」での影響が大きい。Waffleの教育プログラムも、実は参加者の多くが「ロコミ」や「学校で配布された紙のチラシ」をきっかけに参加しているという。森田さんはこう話す。「開催自治体の学校に紙のチラシを配っていたけど、保護者や先生がプログラムを見つけて、『楽しめそうだから行ってみたい？』と子どもたちを後押ししてくれます。参加理由のうち、こうした「身近な大人の後押し」による参加者が約半分を占めています」。現在、年間約千人にプログラムを提供している。内訳は、Waffle Campが約120人（2025年）Technovation Girlsが約440人（同年）などで、参加者数は年々増加傾向にあるという。

新しい時代を担うテックリーダー

これまでは「個人」と「制度」に働きかける活動を積み重ねてきたが、その中間にある「コミュニティ」や「機会・リソース」の領域には、まだ伸びしろが残されていると、森田さんは言う。2030年に向けてWaffleが重視するのは、参加者、メンター、保護者、地域の協力者など、多様なステークホルダーがつながり続けるコミュニティ基盤を強化し、全国のパートナー団体と協働して「女子とノンパ



気仙沼でのワークショップの様子

イナリー向けの学びのエコシステム」を各地に広げていくことだ。そんな次のステージに向けた課題は、山積している。教育の成果を「単発の満足度」ではなく、「進路・就業・継続学習」といった長期的な変化で捉える評価指標の整備、初回の学びのハードルを下げるため、短時間で学べるコンパクトな講座を担うトレーナーの育成。そして、自治体・教育委員会・企業の人材育成と接続させ、学びを政策レベルに落とし込む働きかけである。こうした取り組みの先に見据えるのは、地域や家庭の経済状況に左右されず、全ての子どもが学びにアクセスできる社会だ。その結果として、テクノロジー領域で活躍する女性やノンバイナリーのテックリーダーが当たり前になり、その多様性が自然とプロダクトやサービス

中で、「車いす利用者が電車に乗るときは大変そうだ」という話題が上がった。その時、生徒は自らが車いすユーザーであることを打ち明け、日々の困りごとを率直に語ってくれたのだという。そこからチームの方向性が一気に定まり、「ユーザーの乗降待ち時間」と「駅員の負担」双方を減らすアクセシビリティ支援アプリを開発した。完成したアプリは、ピッチイベントで企業賞を受賞し、審査企業から「今の社会に同様のサービスがなかったことに驚いた」「社会インフラの一つだと思う」と高い評価を得ている。

生徒を心配していた教員は、初回講義の後に「とても楽しかった」と本人から報告を受け、感涙したという。この生徒はその後、テクノロジーへの探究を深めている。

生徒を心配していた教員は、初回講義

の後に「とても楽しかった」と本人から報告を受け、感涙したという。この生徒はその後、テクノロジーへの探究を深めている。



Technovation Girls 2025 日本公式 ピッチイベントの参加者

背中を押してあげることで、世界は変わる

「Waffleのプログラムに参加するかどうかを決めるのは、ほんの小さな興味や『やってみよう』という気持ちだけで十分です。プログラミングが得意である必要も、英語が完璧である必要もありません。むしろ大切なのは、可能性の芽を摘まずにそっと背中を押してくれる大人の存在です」。森田さんは、そう呼びかける。信頼できる大人から「あなたならできるよ」と声をかけられたとき、子どもたちは驚くほどまっすぐに進んでいく。その一歩が、将来の選択肢を開き、まだ見ぬ未来を形づくっていく。だからこそ、保護者や先生など周囲の大人には、迷っている子どもたちをぜひ後押ししてほしい、と言う。学校・家庭・企業・行政、それぞれの立場から、できることがあるはずだ。

森田さんは続ける。「そして、中高生・大学生の皆さんには、どうか勇気を持ってドアを開けてほしいと思っています。Waffleのプログラムは無料で、いつでも開かれています。これまで機会に出会えなかったとしても、今からでも遅くはありません。気持ちさえあれば、次の景色は必ず変わります」。新しい時代のテックリーダーは、今日もここから生まれていく。